

An Interview with  
**Simon Stephens**  
 次の時代を牽引する英国人劇作家  
 サイモン・スティーヴンス  
 インタビュー



PHOTO=S.KANE

**イ**ギリスの劇作家、サイモン・スティーヴンスの快進撃が止まらない。年明け、マンチェスターでの『Blindside』を皮切りに、国外では、翻案を手掛けたイブセン劇『人形の家』のNY進出、ベルリンでセバスチャン・ヌープリング演出での『Garmen Disruption』が幕を開け、4月には東京で昨年のオリヴィエ賞受賞作『夜中に犬に起こった奇妙な事件』の日本版、そして本拠地ロンドンで最新作『パードランド』の開幕と、この数カ月、世界各地でオーブニングラッシュが続いている。文化の壁を越えて多くの人に支持されている彼の戯曲、その魅力の秘密とは――。スティーヴンスに話を聞いた。

現在43歳のサイモン・スティーヴンスは、ヨーク大学在籍中に演劇と出会い、卒業後は英国を代表する劇作家を多く輩出してきたロンドンのロイヤル・コート劇場（以下、RCT）の文芸部に所属。

若手劇作家のためのプログラムの中心的指導者として頭角を現す傍ら、自らも作家としての才能を開花させた。

『ブルーバード』（98年）でRCTでのデビューを果たしてからは毎年のように話題作を発表。2005年の『広い世界のほとりに』（日本では08年にtpptが上演）でオリヴィエ賞を受賞したころには英国演劇界の将来を担う新時代作家の旗手として一身に注目を集める存在となった。

その評判は早くから日本へ届き、『ハーバー・リーガン』『千に砕け散る空の星』（ともに10年）、『ポルノグラフィ』（11年）、『ウォーストウォーター』『夜中に犬に起こった奇妙な事件』（ともに14年）など、同時代の作家としては珍しく、新作の翻訳、上演が続いている。

数日前にNYから戻ったばかりで『パードランド』稽古初日に参加するという彼に会うためにRCTのバーへ向くと、現れたのは、190センチの長身イケメン。陰

惨でダークな作品のイメージとは正反対、手振りを交えマシンガントークを連発し、快活に笑い、エネルギーギッシュに語る、演劇界の寵児スティーヴンスだ。

本国のみならず海外でも多くの支持を集めている現状について、当人にその理由を尋ねると、「デイヴィッド・グレッグがサラ・ケインの戯曲集の前書きで『渴望』のモノローグがなぜ深く人びとの心に共鳴するのかについて、それは『芸術における表現では詳細にこだわればこだわるほど、普遍性を有する可能性が増えるから』と述べていたけれど、僕の戯曲が普遍的であるとするなら、そのあたりは答えを見つけることができるかもしれない」と解説してくれた。

確かに彼の戯曲には多くの詳細な地名、固有名詞が含まれる。例えば、05年にロンドンで実際に起きた爆弾テロ事件を題材にした『ポルノグラフィ』では無名のロンドン市民たちの日常の断片が、細かな情報とともに語られてい

る。お気に入りの散歩コース、人気TV番組名、当時はやっていたポップソング、毎朝飲むコーヒーの銘柄、そしてテロ後、市内を横断し徒歩で帰宅した際の詳細なルートなど……。

結果として、それらの具体的な情報のおかげで読者（観客）は劇中のキャラクターたちの理解を深め、同世代を生きている身近な存在として彼らと共鳴することができるといっわけだ。

そんな細部にこだわると同時に、最終的に目指すのは宇宙規模の大きな劇世界だ。と彼は言う。「狭い世界にいる人同士の間接性に興味があるし、そ

れらと政治的な関心をつなぎ合わせることも興味がある。でも、無名の登場人物たちをリアルかつ普遍的に書くためには、むしろもっと大きなところ、はるか遠くにある宇宙から思いっきりズームしてその人を描写するような、広大なスケールの視点で劇を構築することが必要なんじゃないかな。誰もが宇宙の構成要因、という点



PHOTO=BRINKHOFF/MOEGENBURG

日本でも翻訳上演された、マーク・ハットン原作、スティーヴンス翻案の『夜中に犬に起こった奇妙な事件』（写真）。宇宙飛行士を夢見るアスペルガー症候群の少年の物語を、少年が想像の中で地球を飛び出し、宇宙から地球を俯瞰するような、スケール感のあるシーンを織り交せてファンタジックにつづった。また、同世代の英国劇作家デイヴィッド・エルドリッジ、ロバート・ホルマンとの合作『千に砕け散る空の星』では、空から星が落ちてきて地球が終焉を迎える直前を描くなど、スティーヴンスの独特の世界観がうかがえる。



「アートパンクバンド」Country Teasersに参加するなど、音楽にも造形が深いスティーヴンスだが、最新作『バードランド』の主人公はロックスター。社会的成功後、虚無感に苛まれる同役を、スティーヴンス作の一人芝居『Sea Wall』(2008・13年)で好評を博し、TVドラマ『SHERLOCK』の悪役モリアーティでもおなじみの、アンドリュー・スコット(写真上・中央/下・左)が演じている。

人間的な、そしてポジティブなアートだと信じている。僕は演劇人として、そして3人の息子を育てる父親として、悲観的でなんていられない」と、演劇の素晴らしさに話が及ぶと次の予定のため呼びに来たスタッフをも制して一段と口調に熱がこもった。

「ウオストウオーター」や『バードランド』は、問題を抱えた人たちの話で悲観的な戯曲ともとれる。そんなタークな作品でも、演劇創作の過程で起きていること自体はとても前向きなんだ。まず、作家は演出家に「これが僕が書いた戯曲。君を信じているよ、ぜひ、演出してくれ」と作品を託し、演出家は役者たちを「これが私の信じるやり方だ、さあ、信頼して私の演出につ

きあってくれ」と奮起させる。役者や制作スタッフは「これがわれわれの思う最高の舞台です。私たちを信じて言葉に耳を傾けてください」という姿勢で観客に対峙する。プラス思考で常に前向きでなければ演劇なんてやってられないよ。デジタル機器で人とかかわることが日常化している今だからこそ、他人同士が狭い空間で体験を共有するこの演劇というアートが必要とされるのだと思う。演劇はますますラジカルに、ますます社会に必要とされる芸術になっていくと断言するよ」

では文化の違いも共鳴の支障にはならないはずさ」

社会事象を扱った芝居が大きな比重を占める英国演劇、特にその分野で定評のあるRCT出身の作家としてはどう感じているのだろうか。

「社会の「何」を演劇という鏡に映し出すのか、それをどうやって表現し観客へ渡すのか、つくり手として常に大きな責任を感じて

いるよ。なぜなら芝居には観た人を変える力があるという確信があるからね。その変化はすてきなものであるとは限らないし、時には退屈で時間の無駄と思える芝居もあると思うけど、それでも変化に変わりはないわけで。その時は気付かなくても、その後の人生を変えてしまうような変化をもたらすことも多々あるからね」

「演劇はこの世で一番貴い、一番

ター」や『バードランド』は、問題を抱えた人たちの話で悲観的な戯曲ともとれる。そんなタークな作品でも、演劇創作の過程で起きていること自体はとても前向きなんだ。まず、作家は演出家に「これが僕が書いた戯曲。君を信じているよ、ぜひ、演出してくれ」と作品を託し、演出家は役者たちを「これが私の信じるやり方だ、さあ、信頼して私の演出につ

あくまでもポジティブに、世界の片隅で生き、煩もんする人を描くスティーヴンスの劇世界に触れて人生を変えてみたいと思ったあなた、『バードランド』は5月末まで絶賛上演中。お急ぎを。

サイモン・スティーヴンス 71年までの劇作家。リリック・ハマースミス劇場のアソシエイト・アーティストを務める。6月より一夜中大に起こった奇妙な事件」アポロ劇場での天井崩落で休演中)が、ギールド劇場で上演を再開。10月に、ヤング・ウイック劇場にて新訳を手掛けた「桜の園」の上演が控える。